外国人として生きる

日本のなかのブラックボックス

南 真木人（みなみ まきと）
本館民族社会研究部

見えざる恩恵

現代社会は誰のどのような仕事のおかげで、自分は着て、食べて、住んでいるのかが見えづらい。産品やサービスはことごとく貨幣という価値に置き換えられ、価格でしかその有難みをとらえられないでいる。ここ数年、わたしは日本に超過滞在し就労していたネパール人のことを調べているが、彼、彼女らが経験したさまざまな仕事のありようは、わたしたちが日頃気づかない産品やサービスの生産過程を露わにしてくれる。

たとえばAさんは、六月から一〇月まで農家の離れに一人住み込んでキャベツ栽培に従事した。そこでは、ほとんどの農家がブローカーから斡旋された外国人労働者を一～二人かかえているという。七月の収穫期に入ると、早朝二時半からヘリウムを満たしたバルーンライトの灯りの下、家族とともにキャベツの刈りいれ、箱詰め、出荷の作業がはじまる。四時にはトラックが到着しはじめ、約四五分で積荷を終えたトラックは次々と東京、名古屋、大阪などの市場へと向かう。

彼の日当は六〇〇〇円だ。食費として週一回の食料買出しのときに五〇〇〇円が支給され、彼は自炊していた。給料は仕事の過酷さに比べると安い。だが、周りにコンビニひとつなく無駄使いせずに貯蓄できること、日本語がわからなくても作業ができること、入国管理局の摘発が少ないことなどが利点だ。そのため、この季節労働は来日して間もない人が、他に仕事が見つけられないときに就く最後のオプションだといわれている。わたしたちの食卓にあがる旬のキャベツは、こうした外国人労働者の汗の賜物なのだ。

報われる努力と隠された事実

少し古い話だがBさんは、一九九八年まで食肉加工業に従事していた。当時、周辺の同業者には約一五〇人のネパール人が働いていたという。彼の仕事は、解体された牛肉の切り分けと袋詰め、配達助手であったが、注文書が読めるようになってからは多くの仕事を任されたという。日当は一万二五〇〇円。残業の多い月には四〇万円くらいになった。住まいは会社が所有するマンションなので家賃は不要だった。

会社では、熟練の日本人リーダーの下に二〇人のグループにわかれて作業がすすめられるが、リーダーの給料は一日に牛を何頭ヌケル（解体できる）かで決まる能力給である。Bさんは徒弟制的に学ぶ熟練作業をどんどん身につけてゆき、リーダーや同僚から可愛がられたという。当時の彼は体重が七〇キログラムであったが、一二〇キログラムの肉を運べることが自慢だった。この職場は一所懸命やればやるほど自分を認めてくれ、とても働き甲斐があったという。そんな彼の印象に残っているのは、深夜まで働かなければならないクリスマスと年末前の忙しさだ。他の肉より少し高い牛肉は、今でも日本人にとって祭日に食べるご馳走なのだろうと彼はいう。

Cさんは家の解体業に就く。外国人労働者は現場で、捨て置かれた家具や家電の撤去、窓や襖の取り外し、天井や壁の取り壊しなどの手作業を担当し、それが終わると日本人が重機を使って柱などを解体する。リサイクルできそうな家具や家電は、前もって「キープ」の指示が出るが、天井などを壊していると旧一万円札が降ってくることもあるらしい。そんな時は、誰にもいわずにポケットにしまいこむ。ヤマとよばれる分別現場ではリサイクルする鉄クズ、アルミニウムなどと、建築廃材、燃えるゴミ、燃えないゴミを選りわける。こうした作業でもらえる時給は一五〇〇円で、一日八時間働くと一万二〇〇〇円になる。

気になるのはアスベストの取り扱いだ。わたしがアスベストの危険性について話をすると、はじめて耳にしたというCさんは、あの皮膚にチクチク刺さり、洗ってもなかなか取れない綿のようなもののことかという。やはりアスベストも廃棄物として出ているようだ。だが、会社は外国人労働者にアスベストの危険性や中皮腫のことを全く伝えておらず、予防策もいっさい講じていない。最近になって重機の数を増やし、事業を拡大しているというその会社は、ニュースや情報に疎い外国人労働者を雇用して急成長しているようだ。

ネパールと日本のニュースを
ネパール語で伝える
週刊フリーペーパー（日本）

「国際先住民の日」を祝う
ネパール人超過滞在者（日本）

最近は労働ビザを取得し、
マレーシアに出稼ぎに
行く人が多い

海外からの送金で
建てられた豪華な家
（カトマンズ）

日本で稼いだ資金で開いた
ドホーリー（掛け合い歌）レストラン
（カトマンズ）

日本で稼いだ資金の一部で
はじめた商店（カトマンズ）

満たされるべき「人権」

かつてネパールのじゅうたん工場における児童労働が問題となり、ヨーロッパで不買運動が起きたとき、わたしは解雇された児童のその後をケアしない単なる不買運動はストリートチルドレンを増やすだけだと批判した。満たされる「人権」のレベルは各国ごとに異なり、学校に行かず働くことが人権にかなう場合もありうると考えるからだ。同様にわたしは、ネパールの厳しい就職難と低賃金を知る者として、日本における外国人労働者に対する搾取の問題を「人道的」観点から批判する気になれないできた。

だが、アスベストは命に関わる重大な問題だ。代わりの仕事が紹介できないだけに、今は「どんなに署くてもマスクをすることだけは約束して欲しい」としかいえないでいるが、何ができるかを考えている。AさんやBさんのように「外国人として生きる」のならまだしも、外国人ゆえに命を縮めるようなことには、よもや、なってもらいたくない。